

いわゆる「踊る埴輪」の戦前の絵葉書から

水口由紀子

はじめに

平成26年度企画展「ハニワの世界」では人物埴輪を中心に取り上げ、種類や役割等について紹介した。また、全体の展示構成とは別に、コラム展示と称して、「埴輪の男女の見分け方」などの小コーナーも設けた。その一つ「埼玉出土の人気者」というコラムで展示した一枚の戦前の絵葉書について今回は紹介したい。

その絵葉書はその畳紙から昭和5年10月に帝室博物館で開催された「埴輪特別展覧会」に際して発行されたもので、通称「踊る埴輪」⁽¹⁾の絵葉書である（写真1・2）。元は5枚1組であったが、残念ながら入手した時点ではこの絵葉書1枚のみであった。

まず、気になった点は昭和5年という発行年である。なぜなら、これは「踊る埴輪」が発見された年であるからだ。

どのような経緯でこの特別展覧会が開催されたのか、どのような埴輪と一緒に展示されたのか等、気になり資料調査を始めたところ、いくつかの点が明らかになった。

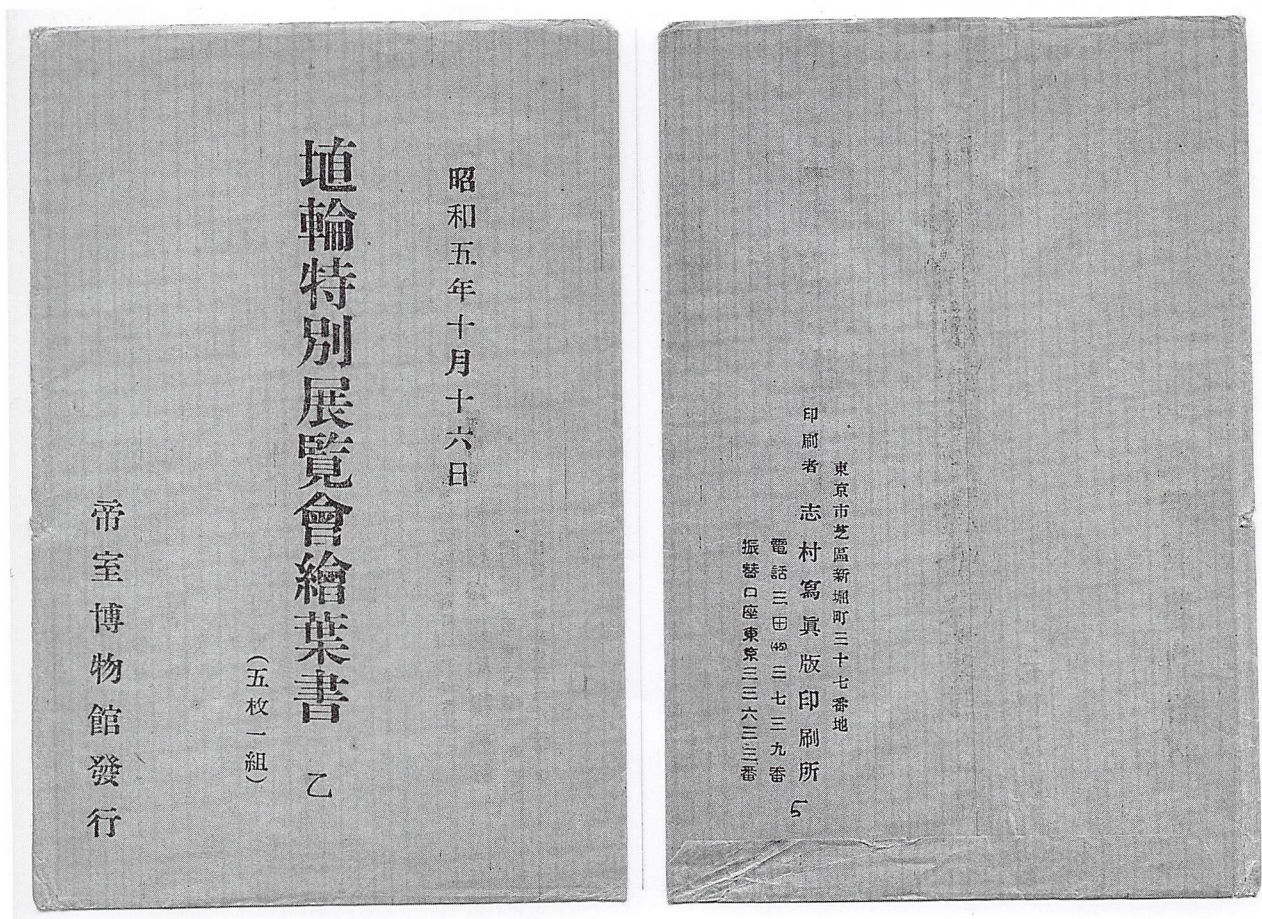


写真1 埴輪特別展覧会絵葉書畳紙（表・裏）

1 いわゆる「踊る埴輪」について

まず、いわゆる「踊る埴輪」について、簡単に紹介したい。

片手を上げ、もう一方の手は胸（または腰）にあて、いかにも踊っているような仕草に見えることから後藤守一氏によって、2体の埴輪を一組と考え、「踊る男女像」と名づけられた。顔、首、体をきちんと表現する埴輪が主流なのに対して、この埴輪は全体がかなりデフォルメされている。目と口を丸くくり抜き、声を出しながら踊っているようにも見える。埴輪の目・口は横長にくり抜かれることが多く、それと比較してもこの埴輪の表情は一風変わっており、印象深い。

現在は東京国立博物館の平成館で常設展示されており、博物館のキャラクター「トーハクくん／本名：東^{あずま}博^{ひろし}」にもなっている。また、埴輪の概説書には必ずと言ってよいほど掲載されており、この一組の埴輪は広く知られている代表的な埴輪の一つである。それにもかかわらず、この埴輪が埼玉県から出土したものであることは意外と知られていない。その出土の経緯や出土地については亀井正道氏の論考にくわしい（亀井1977）。それによると、昭和5年3月21日に埼玉県大里郡小原村（現熊谷市）にある野原古墳群の中の一つの古墳から出土した。

この埴輪が帝室博物館（現東京国立博物館）の収藏品となった経緯は、まず、遺失物法など、当時の埋蔵物発見の手続きについて触れなければ理解できないであろう。

明治32年（1899）に遺失物法が施行され、遺失物、埋蔵物その他の占有を離れた物は警察署

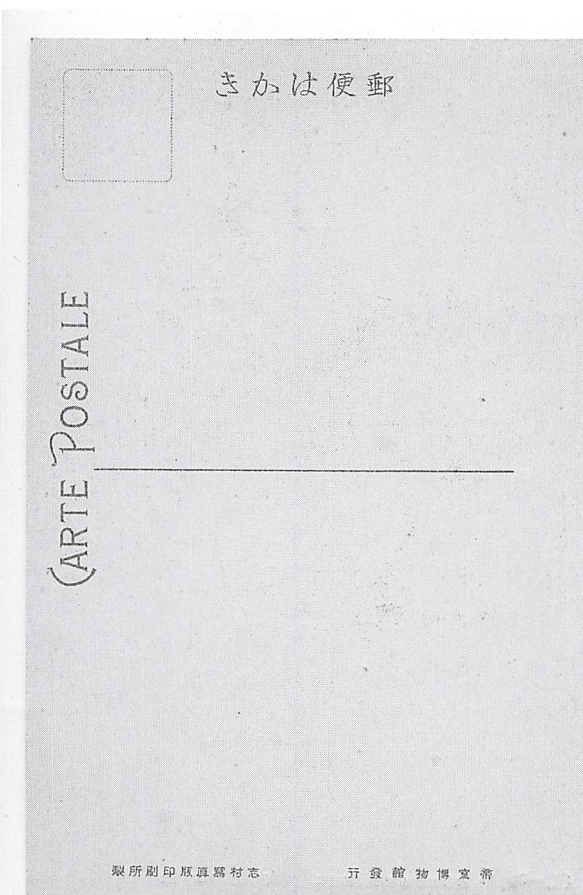


写真2 埴輪特別展覧会絵葉書（表・裏）

に届け出るようになった。

これに関連して、内務省は「学術技芸若ハ考古ノ資料トナルヘキ埋蔵物取扱ニ関スル付訓令」を発して、以下のように取扱いを定めた。

①「古墳関係品其ノ他学術技芸若ハ考古ノ資料」となるべきものである場合は宮内省へ通知する。

②「石器時代ノ遺物」である時は東京帝国大学へ通知する。

これによって、宮内省と東京帝国大学が必要と判断したものは、保有できるような道筋をつけた。戦前に出土した著名な考古資料の多くが、今日の宮内庁や東京国立博物館または東京大学などで所蔵されているのはこのためである⁽²⁾。

また、天皇陵の比定と関連するため、古墳の発見に関しては早くから取り扱いが整えられた。明治7年太政官達「古墳発見ノ節届出方」、明治13年宮内省達「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」、明治34年内務省通牒「古墳発掘手続ノ件依命通牒」など。

この埴輪の場合は古墳からの出土品であったため、まず宮内省へ通知された。しかし、出土した古墳が陵墓ではないという理由から、この案件は帝室博物館へ転送された。この埴輪以外に馬形埴輪や男性埴輪や勾玉、鉄製品なども一緒に出土した。協議を重ねた結果、武人埴輪1点を除き、最終的に帝室博物館が購入した⁽³⁾。埼玉県が発見者の発掘物売却申請書を帝室博物館へ回送したのは昭和6年6月付けであった(亀井1977)。

出土地について、亀井氏は当時の記録類を検討した結果、「小原村宮脇108番地」とするのが正しいようであるとされた。

しかし、その後、江南町史編纂過程の調査によって、発見時の目撃者の証言や地割図、さらに昭和35年の航空写真に残るソイルマークから、出土地は「大字野原字宮脇107番」と「大字野原字境田24番」であることが確定された(江南1995)。

また、この埴輪は開墾中に偶然出土したものであるが、その場所で昭和37年にはゴルフ場に関連した採土工事に伴い、発掘調査が行われた。その結果、この埴輪が出土した古墳は全長約40m、高さ約5m、後円部径約16mの前方後円墳であることが判明し、「野原古墳」と名付けられた。

2 昭和5年「埴輪特別展覧会」について

この絵葉書の豊紙には「昭和5年10月16日」と書かれている。この展覧会の目録が、東京国立博物館の資料館に収蔵されていないか調べたが、残念ながらなかった。国立国会図書館サーチで検索したところ奈良県立図書情報館に収蔵されていることが確認できた。遠方のため、目録の資料調査を半ば諦めかけていたとき、インターネットの古本屋のサイトを検索したところ、1冊だけ奇跡的に出ていたので、さっそく入手した(写真3)。

縦約19cm、横約13cm、厚さ約5mmで、四六判の大きさである。本文は30ページあり、最後に写真図版が19枚ついている。奥付によると昭和5年10月11日印刷、同年同月16日発行、定価25銭、帝室博物館が発行者で、印刷所は鈴木印刷所である。

展覧会の開催期間は昭和5年10月16日から30日まで、展示構成は第1表のとおりである。

第1表 昭和5年 帝室博物館 埴輪特別展覧会 展示資料一覧(1)

室	函	展示資料名	出土地	所有者・写真図版番号	写真図版		
第1室	(群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳出土品すべて)						
	第1函	1	堅魚木を上げた倉屋	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		1	
		2	網代をのせた倉屋	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		2	
		3	納屋	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
	第2函	4	寄棟造の倉庫	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		5	校倉式の倉庫	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		6	校倉式の倉庫	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		7	未詳埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
	第3函	8	杢形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳		3	
		9	笠形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		10	笠形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		11	高坏形埴輪	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		12	鶏	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
		13	鬚形埴輪破片	群馬県佐波郡赤堀村大字今井茶臼山古墳			
第4函	(茶臼山古墳の木炭櫛の復元展示)						
第2室	(土偶陳列)						
	第1函	14	帯を結び垂れた男子	茨城県猿島郡新郷村大字中田町発掘		4	
		15	幘頭を被った男子	埼玉県北足立郡川田谷村八幡原発掘			
		16	白玉の頸玉を纏いた男子	茨城県猿島郡森戸村大字百戸発掘			
		17	農夫の一群	群馬県佐波郡殖蓮村字権現山発掘			
		18	農夫の一群	群馬県佐波郡殖蓮村字権現山発掘			
		19	太鼓をうつ男子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		5	
		20	壺(缶か)を叩く男子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘			
		21	跪座の男子	茨城県行方郡秋津村大字青柳発掘	東京帝国大学人類学教室蔵		
		22	革甲着用男子	群馬県群馬郡岩鼻火薬製造所構内発掘			
		23	桂甲着用男子	茨城県行方郡秋津村大字青柳発掘		6	
		24	弓を執る武装男子	栃木県安蘇郡犬伏町大字犬伏発掘			
		25	楯を樹てゐる武装男子	熊本県八代郡野津村発掘			
		第2函	26	柄に手をかけてゐる武装男子	群馬県群馬郡箕輪町大字上芝発掘		7
	27		甲衣を右袷に著けた男子	群馬県新田郡世良田村大字世良田発掘	和田千吉氏蔵		
	28		天冠を被った武装男子	群馬県佐波郡三郷村波志江発掘	柴田常恵氏蔵		
	29		頭形の冑を被る男子	埼玉県児玉郡十條村発掘		8	
	30		楯を前にする男子	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘			
	31		二合刀子を下げてゐる男子	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘			
	32		結髪して美豆良する土偶	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘			
	33		長衣を放り着た女子	栃木県河内郡雀宮村大字雀宮宿発掘		9	
	34		瓶を手にする女子	群馬県佐波郡赤堀村大字下觸発掘			
	35		坏を捧げる女子	茨城県行方郡秋津村大字青柳発掘	東京帝国大学人類学教室蔵		
	36		袈裟様のものをかけた女子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘			
	37		壺を頭にのせて運ぶ女	埼玉県児玉郡丹庄村大字関口発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	10	
	38		掛帯をかけた女子	群馬県群馬郡箕輪町大字上芝発掘			
	第3室		(動物・器物及び家の埴輪類)				
			第1函	39	飾馬	群馬県佐波郡赤堀村大字下觸発掘	
		40		面繫だけの馬	埼玉県比企郡大谷村字花ノ木発掘	根岸伴七氏蔵	
		41		牛	奈良県磯城郡田原本町字東羽子田発掘	田原本町出品	
		42		猪	千葉県東葛飾郡我孫子町発掘		
		43		犬	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		11
		44		犬	茨城県筑波郡小野川村大字下横場発掘		
		45		猿	茨城県行方郡立花村大字沖洲発掘	中澤澄男氏出品	
		46		鳩	埼玉県児玉郡青柳村発掘		
		47		水鳥	大阪府南河内郡古市村應神天皇陵発掘		
		48		鶏二羽	茨城県那珂郡平磯町磯前発掘	星一雄氏蔵	
		49		甲	宮城県名取郡下増田村大字杉ヶ袋発掘	遠藤源七氏蔵	12
50		甲		宮城県名取郡下増田村大字杉ヶ袋発掘	遠藤源七氏蔵		
51		楯		奈良県某陵発掘			

第1表 昭和5年 帝室博物館 埴輪特別展覧会 展示資料一覧(2)

室	函	展示資料名	出土地	所有者・写真図版番号	写真図版
第2室	第2函	52 靴	群馬県新田郡強戸村大字西長岡発掘		
		53 鞆	群馬県佐波郡殖蓮村大字八寸発掘		13
		54 椅子	群馬県佐波郡剛志村字下武士発掘		14
		55 寄棟造の舎屋	茨城県多賀郡松原村大字高萩発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	
		56 寄棟造の舎屋	茨城県多賀郡松原村大字高萩発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	
		57 大丸棟の家	奈良県磯城郡城島村大字外山発掘		15
		58 二階建の家	兵庫県飾磨郡水上村大字白國字人見貝塚発掘	和田千吉氏蔵	
		59 煙出孔のある家	宮城県名取郡下増田村大字杉ヶ袋発掘		
		60 板格子でおさへた屋根	群馬県多野郡美土里村大字白石発掘	東京帝国大学人類学教室蔵	
		61 切妻の屋根	埼玉県大里郡畠山村発掘		
		62 切妻の屋根	群馬県新田郡九合村発掘		
		63 煙筒を立てた屋根	群馬県多野郡本郷村発掘		
		64 串を棟上に立てた屋根	群馬県佐波郡三合村波志江発掘	柴田常恵氏蔵	16
		第4室	(人物埴輪概説)		
第1函	第1函	65 衣袴を着けた男子	埼玉県比企郡大谷村字花ノ木発掘		
		66 短甲をつけた男子	武蔵国北埼玉郡上中條村発掘	根津(岸カ)伴七氏蔵	17
		65 ^(ママ) 五鈴をさげた女子	群馬県佐波郡赤堀村大字下綱発掘		
		68 飾馬	埼玉県北埼玉郡上中條村発掘		18
第3函	第3函	69 武装男子一對	栃木県下都賀郡南犬飼村大字安塚発掘		
		70 踊る男女	埼玉県大里郡小原村大字野原発掘		19
第4函	第4函	71 土偶及び馬	埼玉県大里郡大寄村大字上敷免発掘埴輪	(計7点展示)	

※ () 書きは筆者が加筆したもの

第1室から第4室に分けて、合計79点の埴輪を展示する規模の大きな展示であったことがわかる。「踊る埴輪」は第4室の第3函に資料70「踊る男女」として展示された。

第4室の展示趣旨は目録によると「埴輪の中で、圓筒を除いては土偶が最も著しい。土偶は其の起源・意義等にも考究すべき問題が残されてゐるが、しかし、これを服飾史の立場から見るのが、最も趣味あることであろう。土中してゐる遺物だけでは、上古時代の服飾を明らかにすることが困難である。とはいへ、一方、埴輪は何故に、またどんな風に樹てられたか、外國に何か関係があるかといふ様な問題にも注意を怠つてはならぬ。此の室は埴輪概説という様な意味合いで陳列されている。」とある。

また、第3函の冒頭には「埴輪土偶は、男女とか、全く相似た姿態の男子とかいふ様に、対をなすものをならべることが多かったらしい。今、ここに其の二例を陳列する。」とある。

そして、「踊る男女」は「その作雅拙(4)にして怪奇の風があり、普通の埴輪と趣を異にするものがあるが、歌舞に興する男女の姿態を備えてゐる。」と解説されている。

現在、「土偶」は縄文時代から弥生時代にかけての人物または動物をかたどった土製品を指すが、明治大正時代は人物埴輪も「土偶」または「埴輪土偶」と呼ばれていた(水野・小林1959)。昭和初期もまだ同じ呼称が使用されていたことがわかる。

目録の図版19が「踊る埴輪」であるが、絵葉書のアングルと少し異なっており、2体とも正面を向いている。欠損した円筒部は石膏によって復元されているが、着色はされていない(写真1・写真4)。

この他に何か情報が得られないか調査したところ、昭和13年に帝室博物館が刊行した『帝室

博物館略史』に大正14年から昭和12年までの展示活動の記録が掲載されていた。

それによると昭和5年には特別展覧会が2回開催されており、4月に浮世絵、10月が埴輪をテーマとしたものであった。また、目録と絵葉書が刊行されていたことも記されていた。絵葉書は二組とあるので、本稿で紹介している絵葉書と異なる内容の絵葉書が刊行されていたことが判明した。今回紹介している畳紙に「乙」とあるので、「甲」がもう一組の絵葉書であると思われる。

また、講演会の記録の中では、昭和5年10月18日に2本の講演が行われたことが記されている。

- ・上古の住宅 後藤守一
- ・埴輪に関する二三の考察 文学博士 濱田耕作

前者には埴輪という文言は見えないが、埴輪特別展覧会の会期中であり、展示資料に家形埴輪が複数含まれているので、おそらく埴輪にも言及した内容であったと推測される。

この展覧会が開催された場所について次に見てみたい。

昭和5年よりも遡るが、大正12年の関東大震災は帝室博物館にも大きな影響があった。すなわち、本館を含む大小4つあった陳列館の大半を失ったのである。新しい本館は昭和13年にやっと開館に漕ぎつけることができた。それでは、その15年間はどのようにして展示活動を行っていたのであろうか。

『帝室博物館略史』をみると、表慶館だけは震災の影響を唯一受けなかったため、新本館が開館するまではここだけで陳列を行わざるを得なかったと記されている。

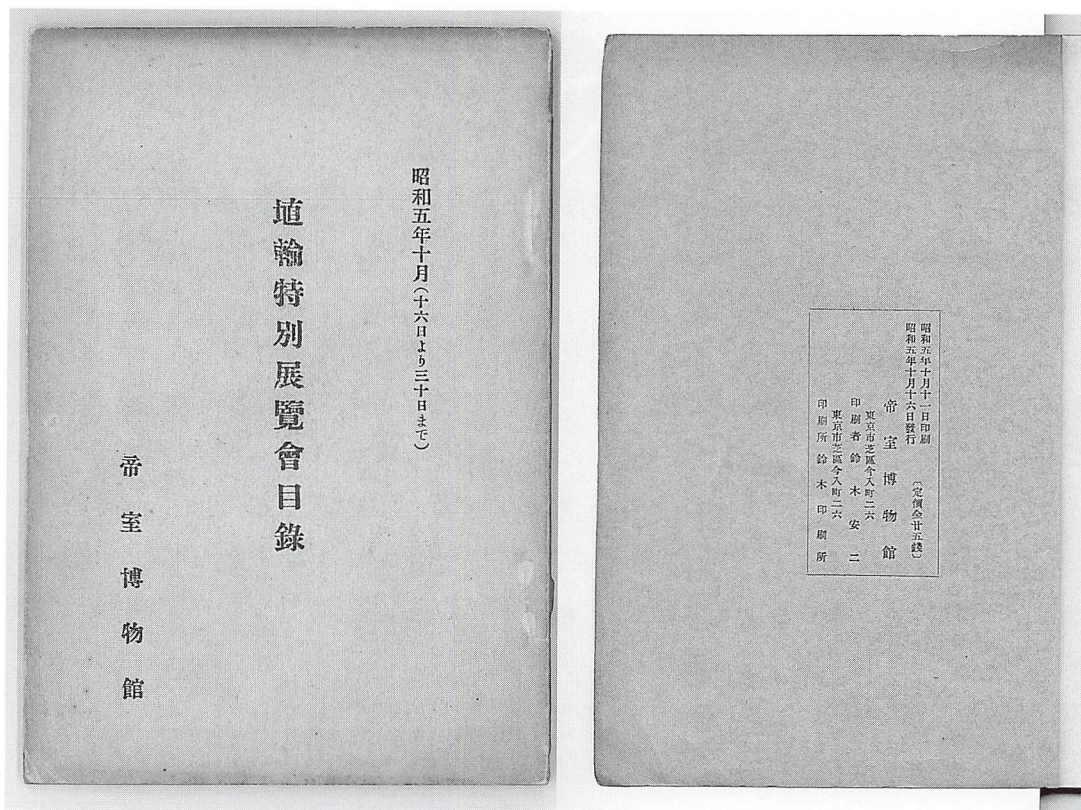


写真3 埴輪特別展覧会目録（表紙・奥書）

表慶館は明治33年に皇太子（後の大正天皇）の御成婚が決まったことの奉祝記念として建設計画が始まった。それは、「東宮御慶事奉祝会」を結成し、会員の出資金によって東京市内に美術館を建設し、奉獻するという計画であった。会員は7,307名、会員外の賛助者15,890名、合計23,197名（団体等は1名として計上）に及んだ。設計は片山東熊に依頼し、耐震対策を十分に配慮して明治34年に着工した。開館したのは明治42年5月であった。

新本館が開館するまでの表慶館での陳列配置は『東京国立博物館百年史』（東京国立博物館1973）にくわしい。それによると、特別展覧会は2階の第1室から第4室までの平常陳列を撤去して実施していたとある。

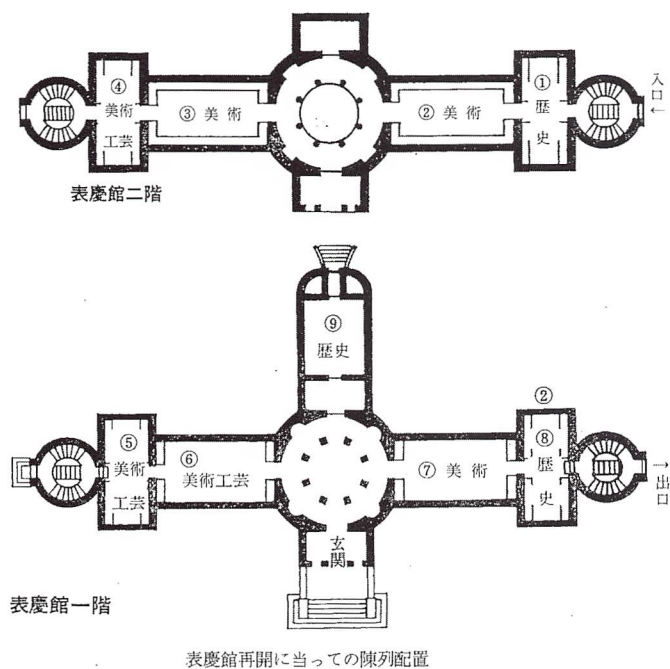
よって、本稿が取り上げている「踊る埴輪」は表慶館の2階第4室に展示されたと考えられる。

まとめ

1枚の戦前の絵葉書の資料調査から興味深いことが明らかになった。

この絵葉書は、「踊る埴輪」が偶然発見された昭和5年に、帝室博物館で開催された「埴輪特別展覧会」に伴って発行されたものである。この展覧会は目録・絵葉書の発行、講演会の開催などが伴う規模の大きなものであった。また、当時は関東大震災からの復旧がなされていないため、この展覧会は表慶館の2階で開催された。

また、何よりも重要なことはこの特別展覧会が「踊る埴輪」が博物館施設で初めて一般公開された展示会であると推定されることであろう。そして、この絵葉書は「踊る埴輪」の絵葉書としては最古のものである可能性が高い。



第1図 表慶館の平面図（東京国立博物館1973より）
（関東大震災後、新本館が開館するまでの陳列配置）



写真4 『埴輪特別展覧会目録』
図版第19

【註】

(1) 「踊る埴輪」については、踊っているのではなく、馬をひいている所作なのではないかという指摘がされて久しい（宮崎1990、塚田1992など）。

本稿では通称としてカッコ書きでいわゆる「踊る埴輪」と表記する。

現在も東京国立博物館の常設展示では「埴輪 踊る人々」というキャプションで展示されている。キャプションには何の説明書きもないので、一般の観覧者は踊っている埴輪だと思ってこの埴輪を見ているものと思われる。

また、東京国立博物館のホームページ内にあるコレクション—名品ギャラリーには「踊る男女とも呼ばれる特徴的な人物埴輪である。（—中略—）おそらく殯などの葬送の場における歌舞の姿を写したものとみられる。」と解説が加えられている。

学術的な成果がキャプションに反映されるべきではなかろうか。

(2) 東京国立博物館の前身である帝室博物館は宮内省の管轄下にあった。

(3) 武人埴輪は発見者に返還された後、現在は國學院大学の所蔵となっている。

(4) 「稚拙」の誤りか。

【引用・参考文献】

尾谷雅比古 2006 「大師山古墳の発見と顕彰」 桃山学院大学総合研究所紀要 第31号 第3号

亀井 正道 1977 「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」 MUSEUM No.310 東京国立博物館

江南町 1995 「第5章 古墳時代の遺跡 野原古墳群」 『江南町史』 資料編1 考古

塚田 良道 1992 「鷹匠と馬飼」 『考古学与生活文化』同志社大学（『人物埴輪の文化史的研究』2007 雄山閣に再録）

帝室博物館 1938 『帝室博物館略史』

東京国立博物館 1973 『東京国立博物館百年史』

水野清一・小林行雄 1959 『図解 考古学辞典』 創元新社

宮崎由利江 1990 「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」 古代第90号